

評価委員からの寄稿

二つの I R

教育文化学部准教授 白木智昭

現代の企業経営において、株主や投資家等に対して経営情報を提供する「I R (Investor Relations)」活動は、不可欠の取り組みとして位置付けられています。

その対象は、決算や財務に関する情報提供にとどまらず、事業内容や研究開発の紹介のほか、社会や地域への貢献活動に関する報告等、企業活動全般に及んでいます。

情報開示に積極的な企業や、利害関係者との良好な関係を構築している企業は、「株価」が高く業績が好調な企業が多いと言われています。

一方、大学においても近年、「I R (Institutional Research)」活動が強化されています。

大学の I R 活動とは、財務や教育、研究等に関する情報を収集・分析し、大学経営の意思決定や中・長期計画の策定に貢献するための活動です。

この背景には、教育内容、研究成果、地域貢献、さらには大学の在り方そのものに対する社会や地域の関心の高まりがあると考えられます。

裏を返せば、不適切な活動の判明やその対処の遅れによって、大学の社会的評価が大きく失墜する事態を招く恐れがあるということでもあります。そうした事態が発生すれば、入学希望者の減少や各種資金の縮小を招き、大学経営に深刻な影響が生じます。

このように考えますと、二つの I R 活動はどちらも、社会や地域からの信用や評価を高めるための取り組みに他なりません。

今後人口減少が予想されるなかで、大学も企業も、学生・顧客の確保や研究・投資資金の調達がこれまで以上に大きな課題となります。二つの I R 活動はその組織の経営を左右するほどの重責を担っていると言っても言い過ぎではないでしょう。

しかし、大学 I R は企業 I R と比べて、大きな困難を伴うと考えられます。

それは、大学が教育と研究という独立した二つの分野において成果を求められる点にあります。大学経営においては、それぞれの分野における目標を掲げながら、限られた経営資源（教員・施設・資金）を振り分け、成果を生み出していく必要があります。今や大学においても、企業のように「経営戦略」を構築しなければ、成果を生み出すことができない時代を迎えているわけです。

とりわけ本学は、地域人材の育成、地域社会・企業への貢献、行政との連携といった面での役割も期待されており、大学経営のかじ取りは困難を極めます。

その意味で、本学の「評価・I R センター」は、教育・研究に関する情報を収集・分析し、適切な大学運営の実現をサポートする重要な機関として位置付けられます。

この活動報告が上記の期待に沿い、そして私も評価委員の一人としてその作成のお手伝いのできたのであれば幸いです。